



奄美大島歴史深訪 (4)

— 源為朝の系図とその血流の支配を受けた奄美大島、そして琉球王国 —

広島文化学園大学看護学研究科 特任教授
佐々木 秀美

キーワード：源為朝，奄美大島，薩摩平氏，千竈氏，琉球王国

要 旨

本論では、奄美大島を支配した千竈氏や為朝に由来する事柄を中心に、為朝の系図とその血流の支配を受けた奄美大島と琉球王国との関係について可能な限り検証した。為朝は薩摩平氏の一族である阿多忠景の娘と婚姻して一男一女を儲け、その一人は奄美大島の為家の祖として奄美大島を支配、残る二人は鹿児島土族とみられるが十分な検証ができにくかった。為朝の一女は辻殿と呼ばれる娘を生み、その娘が鎌倉幕府第二征夷大將軍の頼家の妻となって公暁を生み、歴史の表舞台に登場、何の因果か叔父の実朝を殺害するという凶事に及んだという事実があった。そして、庶子と言われる俊天は、琉球王国国王と言う地位を得て、その血流は第二尚氏へとつながった。そして為朝自身は生来有した闘う武将であり、ワイルドでダイナミックな生涯を閉じている。為朝とのつながりから琉球王国も奄美大島も歴史上、為朝とはその血脈を通して関わり合い、文化的・政治的影響を受けた。これらの歴史研究過程において知り得ることは、親子や親族間であっても権力争いに巻き込まれながら、義に基づいて闘い、命を落としていたことである。現在の職業軍人が国防の為に外的と闘う必要があるのと同様、為朝の時代もやはり、闘わずば武士ではなく、戦うために作り上げられた集団が武士集団であったと考えた。

はじめに

さて、既に奄美大島における為家（笠利家、田畑家、龍家）については、系図を中心に『奄美大島歴史深訪 (3) — 為家と琉球王国、そして為家と筆者との関係 —』¹⁾ で報告したが、さらに遡ると田畑氏の系図は笠利家につながり、更には琉球王国、そして源為朝（1139-1170）へとつながっていく。

しかし、為朝については、『保元物語』²⁾、『源為朝伝説』³⁾、などでも検証したが、まだ十分ではない。

それ以前にそもそも鹿児島県の最南端に位置する奄美大島という存在、祖は何者かという問題が生じる。『奄美大島歴史深訪 (2) — 島民を苦悩させたサトウキビと家人（ヤンチュ）制度、そしてケンムン伝説 —』⁴⁾ では、奄美大島の歴史概要として、奄美の名称は古事記では阿麻彌（アマミ）、日本書記では海見（アマミ）と表現されているとか、既に『平家落人と源為朝伝説の島—奄美大島歴史深訪 (1)』⁵⁾ でも若干述べたが、それは神話・伝説の世界である。『古事記』⁶⁾ における国造りの様に、女神の阿摩弥姑（アマミコ）と男神の志仁礼久（シニレク）が天から降りて来て、奄美大島を創ったという。降り立ったのは奄美で一番高い湯湾岳（宇検村と大和村の間）とされるが、なぜかその象徴である神社は笠利町にあ

連絡先：佐々木 秀美

〒737-0004 広島県呉市阿賀南2-10-3

E-mail: hidemi@hbg.ac.jp



図 1 阿摩弥姑神社（筆者撮影）

る（図1）。

奄美・琉球と日本（大和）との交易は貝の道に知られるとおり古くからあったそうだ。琉球や奄美をふくむ南西諸島は美しい珊瑚礁で形成されており、豊かな海産物に恵まれていることから、斧やナイフ、首飾りなどの貝製品が多く用いられていた。その貝や貝製品は貝の道を通して、黒潮に乗って北上し、今から2000年以上前の弥生時代（紀元前10世紀または紀元前4.5世紀頃—紀元後3世紀中頃まで）の日本本土にもたらされた。

『大奄美史』⁷⁾によれば、第53代純和天皇（786-840）時代の824年（天長元年）頃、奄美大島は無所属の時代であった。無所属と言え、独立した島の様に考えられ、穏やかであったと考えられるがそうでもない。『喜界町誌』によれば、997年（長徳3年）の『小右記』の記録には、高麗人や奄美の水軍が九州地区を襲撃したとの報告が大宰府にあったとのこと⁸⁾。一国である高麗はともかくとして、奄美大島に水軍を組織して本土襲撃を目論むなどという力があつたとはとても考えられないが。とにかく、足利時代末期に戦国時代に入ると同時に、南の島々に倭寇（わこう）が出没し、海路手段に頼らねばならない交通も途絶えるような事態に陥った。奄美大島島民も自衛の為に豪族や酋長などが権力を振るう様になり、その酋長も奄美大島の豪族の他に、琉球王国から渡来した者もいた。こうした酋長も様々で悪態無道、横暴の限りを尽くした者もいたようである。例えば、大島北部酋長の平安子（平按司？）という者は無法者であったとか。奄美大島の南部加計呂麻島には実久三次郎（生没不詳）なる者がいて無双の大力であったとか。三次郎と言え、為朝の子供であると言われており、加計呂麻島に残る実久神社については『平家落人と源為朝伝説の島—奄美大島歴史深訪(1)』⁹⁾で既に報告した。

その後、奄美大島は、薩摩平氏の支配と為朝嫡流の支配、そして平氏の落人達の来島によってその支配下に入り、次いで、承久の乱以降、1221年（承久3年）からは鎌倉時代の御家人千竈氏が支配した。しかし、千竈氏も、南北朝時代に南朝方として北朝方の島津氏等と激しく争ったが、後に敗北し、島津氏に臣従した。次に、英祖王統時代の1266年（文永3年）、奄美大島は琉球王国に服属する形となり、千竈氏が1447年（文安4年）に琉球王国との闘いで敗れ、奄美大島は、完全に琉球王国の支配に移行、薩摩が侵攻する1609年（慶長14年）までの約340年間、その支配は続いた。以降、明治維新までの約260年間は薩摩藩支配へと移行し、奄美大島の服従とも取れる歴史があつた。そこで本論では、為朝の子女とされる人物検証を含めながら、奄美大島が薩摩平氏と千竈氏の支配下にあつた時代を経て、琉球王国へと移行する過程と、その過程における為朝との関連も含めながら論じることとする。尚、人物については『吾妻鏡』¹⁰⁾、『平家物語』¹¹⁾、Wikipedia等を参考にした。

I. 源為朝と薩摩平氏、そして千竈氏支配の奄美大島

1. 保元物語にみる為朝

『保元物語』は主として“保元の乱”前後における為朝の武勇伝と、その最後に至る過程が記述されている。同著によれば為朝は、身長2mを超える巨体のうえ気性が荒く、また剛弓の使い手で、剛勇無双

を謳われた頑強な武士であった。その体格と力のなす業か、生まれつき乱暴者で父の源為義（1096-1156）に持てあまされ、九州に追放された。為朝13歳の時である。九州には先述した阿多の平四郎忠景という者がおり、「その婿になりて、君よりも賜わらぬに九国の総追捕使と我を号して、九国なびげんとするに、菊池、原田をはじめとして所々に引き籠りて城を構え、盾をついて用意しけるを、為朝、勢もいまだつかざりけれども、舅の忠景を案内者にて、所々攻めけるに、皆、討ち従えて総追捕にぞなりける。」¹²⁾と記述されている。つまり、為朝は、天皇からの勅令がないにも関わらず、自分勝手に九州の総追捕使を名乗って舅の忠景を案内人にして菊池氏や原田氏を打ち据えたとのことである。となれば為朝は16歳で京都に戻る前には既に忠景の娘を嫁にしていたことになるが、いつの頃に三男一女をもうけたのかは記述されないし、上洛した時、忠景と一緒に正室と言われる忠景の娘と為朝の子供たちも同行していたのか不明である。

菊池氏というのは熊本県菊池郡の豪族の事であり、中関白（なかのかんぱくけ）藤原道隆（953-995）の嫡男大宰権帥藤原隆家（979-1044）の子孫と伝承されるが、実際には刀伊の入寇（といのにゅうこう）の際に隆家とともに奮戦した大宰府官で、その戦功により大宰少貳、対馬守となった藤原政則（997-1064）の子孫であると見られる。刀伊の入寇とは、1019年（寛仁3年）に、女真の一派とみられる集団を主体とした海賊が壱岐・対馬を襲い、更に九州に侵攻した事件の事を言う。女真は満州の前身である。菊池氏は、11世紀後半から肥後国菊池郡（熊本県菊池市）の在地領主として勢力を拡大した。同氏については頼山陽（1781-1832）の『日本外史』にも若干の説明がある¹³⁾。

他方、原田氏は福岡県筑紫郡の豪族である¹⁴⁾。同氏の前身は大蔵氏であるといわれる。大蔵氏は、渡来集団である東漢氏（やまとのあやうじ）の一族で、“壬申の乱（じんしんのらん）”の功臣である大蔵広隅（生没不詳）を祖とする。672年（弘文元年）の“壬申の乱”は、天武天皇（不詳-686）在位中に起こった古代日本最大の内乱である。一方、939年（天慶2年）、瀬戸内海で海賊鎮圧の任に当たっていた藤原純友（893-941）が、同じ目的で地方任官していた者たちと独自の武装勢力を形成して京から赴任する受領たちと対立して内乱となった。これは“純友の乱”と言う。大宰府は“純友の乱”鎮圧のため大蔵春実（生没不詳）が、源経基（894-961）や小野好古（884-968）らとともに出陣し、海路から攻撃した。この“純友の乱”と同時期に関東で起きた“将門の乱”とを総称して“承平天慶の乱（じょうへいてんぎょうのらん）”とも呼ばれる。大蔵氏は、戦功により菊桐の御紋と日の丸の御印を拝領、征西将軍に任じられ、筑前、豊前、肥前、壱岐、対馬の管領職となり、城を築き移り住んだ御笠郡の地名をもって原田氏と名乗った¹⁵⁾。

為朝は、舅の忠景の協力を得て、これら菊池・原田両氏を10代そこそこで痛めつけたことになる。この九州での為朝の勢力拡大は、狼藉として京まで届き、父親の為義を苦悩させる。為朝の狼藉は朝廷に訴えられ、1154年（久寿元年）に朝廷より為朝に出頭の宣旨が出された。が、為朝はこれに従わなかった。しかし、翌1155年（久寿2年）に父が解官されてしまったことを聞いて為朝は帰参することにし、九州の強者28騎を率いて鎮西八郎と名乗って上洛した。この時の罪はいかほどであったのか記録されない。

翌、1156年（保元元年）、鳥羽法皇（1103-1156）が崩御すると、崇徳上皇（1119-1164）と後白河天皇（1127-1192）が次期天皇を巡って争いが起きた。これが“保元の乱”である。為朝の父、為義は上皇方の大将として招かれ、為朝ら6人の子を引連れて崇徳上皇の御所白河北殿に参上した。一方、為義の嫡男で坂東を地盤としていた源義朝（1123-1160）は多くの東国武士とともに天皇方へ参じた。ゆえに、この闘いで義朝は平清盛（1118-1181）と志を同じくしたことになる。為朝が、御所白河北殿の西門を守っている時、清盛の軍勢が為朝の守る西門に攻めてきた。その軍勢の中に平安時代中期の貴族、藤原秀郷（891-958）の血流で、伊藤景綱（生没不詳）とその子忠景（忠清とも呼ばれる 不詳-1185）、そして伊東忠直（不詳-1156）が名乗りをあげた。すると為朝は、「為朝がこの門をば固めたるなり、汝は、さては合わぬ敵ござんなれ、平氏の郎党なれば、引いて引き候へ。汝が主の清盛だに、合わぬ敵と思うぞや。」¹⁶⁾と叫んだ。そのわけは、平家は王孫と言えども柏原天皇の末にあるので、隔たりがありすぎる。しかし、源氏は、清和天皇の子孫で、為朝まで九代にあたる。六孫王の七代、満仲が六代の後胤、頼義が四代の孫、だから、郎党に向かって弓を放ってはならない。景綱ならば引き退けと言いつつ放った。景綱は「源平、二つの家、朝家に召し使われ、左右の翼にて本国の両大将なり。平氏の郎党は源氏を射、源氏の郎党は平

氏を射つこと、今にはじめぬことなり。互ひに射ずは、合戦あるべきや。」¹⁷⁾とやり返した。為朝の言う満仲とは源満仲(912-997)の事であり、清和源氏の六孫王経基の嫡男である。源経基(不詳-961)は、第56代清和天皇(850-881)の六男で皇族に属し、“六孫王”と名乗り、経基流清和源氏の初代とされている。経基の嫡男が源満仲(912-997)、そして、満仲の三男が源頼信(968-1048)で河内源氏初代棟梁、その嫡男の源頼義(988-1075)が二代目棟梁になっている。ゆえに、為朝が述べた源氏の子孫で六孫王の七代、満仲が六代の後胤、頼義が四代の孫、為朝までが九代は確かである。

この西門では、義朝の坂東武者と為朝の鎮西武者との間で火が出るほどの戦いが繰り返され、為朝の28騎のうち23騎が討ち死にしてしまった。一方、坂東武者も53騎が討たれた。他の門でも激戦が続き、勝敗は容易に決しなかった。義朝は内裏へ使者を送り火攻めの勅許を求め、後白河天皇はこれを許した。火がかけられ風にあおられて、白河北殿はたちまち炎上した。崇徳上皇方は大混乱に陥り、崇徳上皇と藤原頼長(1120-1156)は脱出。為義、源頼賢(不詳-1156)、為朝らも各々落ちた。結局、この闘いは後白河天皇側の勝利に終わった。戦後、崇徳上皇は讃岐の国へ流された¹⁸⁾。為朝は逃亡を続け近江国の小さな山小屋に隠れていたが、病に罹り、湯治をしていたところを密告された。湯屋で佐渡兵衛尉重貞(生没不詳)の手勢に囲まれ、真っ裸で抵抗もできず捕えられた。重貞は、清和源氏の一族で近江国矢島を本拠とする在京軍事貴族(京武者)であり、保元の乱では、兄の源重成(不詳-1159)と共に後白河天皇方に属して勝利した。為朝が京へ護送された時には、名高い勇者を一目見ようと群衆が集まり、天皇までが見物に行幸した。清盛軍の先陣を勤め、戦功を挙げた景綱は、平家の有力武士として従五位下・伊勢守に任じられ、数々の合戦で活躍した。為朝の舅と言われる忠景はこの時、どうしていたのか？

戦後処理の一環として清盛は叔父の平忠正(不詳-1156)を、義朝は父の為義を命令によって切った。この時、源平17人が処刑された。彼らは崇徳上皇方に加勢した面々である。人々は「ああ、世に栄えようと思うほど、いやなものはあるまい。清盛は、叔父忠正の首を切る。義朝は、父親の首を切る。いやな事であった。」¹⁹⁾と朝廷の処理に不満を示し、天子が善政を行えば、海外の蛮族まで国を守る存在になると言われているように、善政を行うことが大切なのに今回の処置は適当と思われぬ等と非難した。「父が首を刎ぬる子、子に首を刎ねられる父、切るも切られるも、罪報のうたてきことを悲しむべし、悲しむべし、南無阿弥陀仏」²⁰⁾

位があがり役職を賜った清盛とは違って父を切った義朝は無役のままで、3年後の1159年(平治元年)には“平治の乱”で戦死した。“平治の乱”とは京都を舞台に、源氏と平氏が朝廷の皇位継承を争った闘いで、義朝率いる源氏は敗北、勝利した清盛率いる平氏が政治の表舞台に立つ契機をつくった。

そうした戦後処理も一段落した時分に捕縛された為朝は、武勇を惜しまれて助命され、1156年(保元1年)8月26日に自慢の弓を射ることができないよう、両の肩関節を外された後に伊豆大島に流刑となった。伊豆に下る前、流人が腰かけることになっている石に腰掛けるように言う「かけたらどうなる、かけなかったらどうなる」²¹⁾と最後までかけなかった。強情極まりなかったと記される。流刑地で過ごすうち、為朝の抜かれた両肩は自然治癒して、弓の力は以前ほどではないが、かなり回復した。為朝は、八丈が島に青鷺・白鷺が飛ぶのを見てこれより沖に、島があるに違いないと船をこぎだす。そして、一つの島にたどりついた。島民に島の名前を聞くと“鬼島”と答えた。為朝は岩場に住む魚を取り、空を飛ぶ鳥を射て食した。為朝の様子が朝廷に報告され、為朝追討の院宣がなされた。為朝は家に火を放ち、自害して果てた。享年28歳であった²²⁾。

『保元物語』は「為朝は13歳にて築紫へ下りたるに、三か年に鎮西を従えて、我と総追補使になりて六年治めて、十八歳にて都へ上り、官軍を射て、かひなを抜かれ、伊豆の大島へ流されて、かかるいかめしき事どもしたり。二十八にて、つひに人手にかからじとて自害しける。為朝が上超す源氏ぞなかりける。」²³⁾と結論づけられている。為朝誕生の1139年(保延5年)から単純に計算して為朝13歳は1151年(久安7年)、16歳は1154年(仁平4年)、18歳は1156年(保元元年)、この年が“保元の乱”、28歳は1166年(永万2年)で10年後に為朝は自害して果てたことになっている。為朝を超す源氏はいなかったとの賛辞もあるが、実に破天荒でダイナミックな人生であった。いかめしき事とは尋常ではないあるいは常識的には考えられない偉業の事であろうか。しかし、WEB上で示される為朝の没年は1170年(嘉応2年)である。伊豆大島の流人となった為朝はやがて傷が癒え、その強弓の技が戻ると再び暴れ始め、島の代官

の三郎大夫忠重（藤井忠重 生没不詳）の婿となり伊豆諸島を従え年貢も出さなくなった。1170年（嘉応2年）、伊豆諸島を所領する工藤茂光（不詳-1180）は上洛して為朝の乱暴狼藉を訴え、討伐の院宣が下った。為朝は、島で生まれた9歳になる我が子の為頼を刺し殺し、押し寄せる追討軍に応戦した後、自害した²⁴⁾と記述される。享年32歳であったとする。しかし、ここで終わっては、正室との間にもうけられた三男一女の話や、次の奄美大島への来島および琉球王国での俊天の生誕にはならないのだが。

2. 源為朝と薩摩平氏支配の奄美大島

『保元物語』に記述されたように、為朝が16歳で京に戻った時、同行した舅と言われる阿多忠景（生没不詳）は、平貞時（生没不詳）を祖とする薩摩平氏（さつまへいし）の一族である。そして、薩摩平氏は、中世前期の平安末期から鎌倉時代頃まで、主に薩摩半島を支配した平氏一族である。図2は、桓武天皇（737-806）を祖とする薩摩平氏の系図であるが、諸説を参考に筆者が作成した。

まず、太枠で示した部分は『平家物語』²⁵⁾の巻末に示された系図上、桓武天皇から葛原親王（786-853）、高見王（生没不詳）、そして高望王（850-916?）とその子供たちである。高望王と正室藤原良方（生没不詳）の娘との間に国香とも呼ばれた長男良望（不詳-935）、二男良兼（不詳-939）、三男良将（873-不詳）、四男良茂（良繇878-不詳）、側室藤原範世娘との間に五男良文（886-953）がいる。

『平家物語』では、長男良望（国香）の子孫として平忠盛（1096-1153）から清盛へと系図が続く。『吾妻鏡』は鎌倉幕府を中心とした業務日誌風の著作である。この著作の巻末にも平氏の系図が掲載されているが、清和源氏の系図も含め、『平家物語』同様の系図であり、ここにも貞時の名前は見いだせない。また、この系図の三男良持（873-不詳）の次男が将門（903-940）である。

図2の右側、点線部分は、『覚鑑上人出自考』²⁶⁾で示された「妙正寺本」²⁷⁾の系図である。この系図では、高望王の二男良将、三男良兼、四男良持、五男良文が高望王の長男良望（国香）の子としてそれぞれ、長男良将、次男良兼、三男良持、四男良文になっている。三男良持の子供に貞時の名前がある。良望の長男の鎮守府將軍平良将の次男に将門がいる。余談であるが、将門は、先述した“将門の乱”の首謀者である。将門の祖父にあたる高望王は、平姓を賜って平高望として臣籍に下り、上総介となり関東に下った。高望の子達は武芸の家の者（武士）として坂東の治安維持を期待され、関東北部各地に所領を持ち土着した。高望の子のひとり良将は、下総国佐倉に所領を持ち、その子の将門は京に上って朝廷に中級官人として出仕していた。良将が死亡したため将門が帰郷すると、父の所領の多くが伯父の良望（国香）、良兼に横領されてしまっていた為、将門は下総国豊田を本拠にして勢力を培った。以後、女性問題や所領の問題などで、将門が叔父たちを打ち取るという親族内の争いが起きた。この争いは、後に朝廷をも巻き込む争いに発展した。いつしか将門は朝敵となった。朝敵となった将門に追討軍が差し向けられ、度重なる闘いの後に、流れ矢が将門の額に当たり討死した。その将門の叔父にあたる良持の子に貞時がいる。

また、図2の左側の点線枠内は、同じく『覚鑑上人出自考』の「中世系図」²⁸⁾で示された系図である。その系図によれば、良文から忠頼（930-1019）、貞道（生没不詳）、次に貞時の名前がある。但し、WEBなどで検索しても良将は良持と同一人物とされ、高望の三男で将門の父となっている。『覚鑑上人出自考』で示された系図上の人物は特定されない。また、点線枠内の良文から忠頼までは同じように検索されるが、貞道なる人物が特定されない。

次に、同じく系図左側の点線上の貞時の孫にあたる平良道（生没不詳）は、伊作良道と伊作姓を名乗り、良道の長男道房は川辺道房と称した。伊作良道（平良道）の子らは河辺一族と言われ各地を支配し権勢を誇った。次に良道の4男の忠景は、阿多忠景（平忠景）と称し、阿多郡を大宰府に寄進するなど一族内で勢力を伸ばした。忠景は、後に継嗣の兄である道房を討った。その頃中央では清盛の権勢が伸長した時期である。忠景は朝廷より薩摩、大隅、日向の三国で専横したかどで追討の宣旨を受け、清盛配下の平家貞（1082-1167）に攻められ、平治年間（1159-1163年頃か）には、硫黄島（鬼界ヶ島または貴海島）に流れたと伝わる。しかし、この頃、忠景は為朝に同行して奄美大島から琉球王国を目指していたのではないか。

『大奄美史』によれば為朝は、1165年（永萬元年）に奄美大島に来島、全島を掌握した後、嫡流である

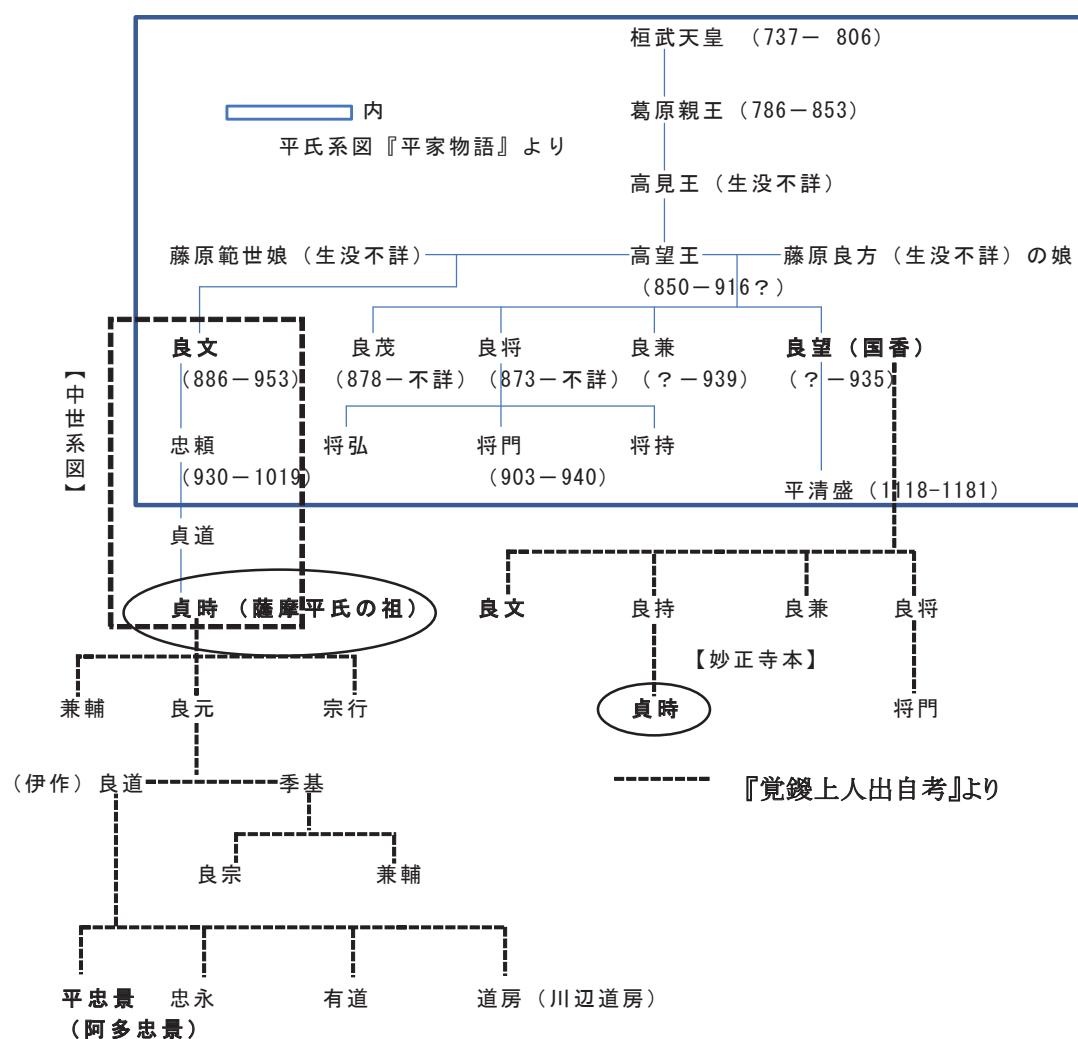


図2 薩摩平氏系図『吾妻鏡及び平家物語』『覚鑑上人出自考』を参考に筆者作成

長男の為頼を奄美大島支配のために親方として残したと記述される。16歳で為朝が長男為頼を授かったとしても、この頃は12.3歳頃であろうか。親方というのは、琉球王国の称号の一つであり、王族の下に位置し琉球士族が賜ることのできる最高の称号で、日本の平安時代には親の代わりを成す尊敬する人物とされる。つまり、1165年（永萬元年）から平家が来島する1203年（建仁3年）以降も為朝の子孫が支配したことになる。そして、琉球へ向かった為朝の庶子、琉球国の舜天（1166-1237）が、誕生したのは1166年（仁安元年）の事である。先述した伊豆大島代官との間にできた子が為頼であるという記述や、為朝が自害する前に為頼を刺殺したとする説はどうなるのか？不透明である。

忠景の所領は、薩摩国府の大蔵氏に与えられた。阿多郡（現・南さつま市）は、12世紀当時天然の良港（坊津港、万之瀬川河口）を備え、南九州の交易の中心であった。日宋貿易やそれに伴う高麗貿易、南島交易の最重要拠点であり、また同貿易が朝廷の統制を受けない私貿易であった。川辺・阿多一族も交易利権で勢力伸長しており。大宰府を含む交易利権を巡る平氏政権との衝突が背景にあった。『吾妻鏡』には1187年（文治3年）、忠景追討の為に家貞は軍船を用意して島に渡ろうとしたが、風浪を凌いで渡れなかったと記述される。また、この島には源義経（1159-1189）に味方した輩が隠れ住んでいるとの疑いも持たれていた為である²⁹⁾という。忠景はその後、どうなったのか？1187年（文治3年）に為朝は既に死亡しているはずだ。そうした時代を経て、鎌倉時代に入ると奄美大島は千竈氏の支配下に入った。

3. 千竈氏支配の奄美大島

奄美大島は1205年（元久2年）に平家落人の侵攻以降、彼らの支配を受け、文化的影響を受けた。その後は、後述する鎌倉時代の御家人、千竈（ちかま）氏が治めていた。千竈時家（1270?-不詳）は、尾張国を本拠地とすると同時に海上交通を掌握したと見られ、千竈氏の支配領域は、鎌倉時代後期には尾張国千竈郷のほか、常陸国、駿河国、薩摩国の得宗領の代官職と、かなり広範囲に及んだ。千竈氏の薩摩国の所領については“承久の乱”（1221年）以降に与えられたものと見られ、川辺郡を拠点に坊津、喜界島、奄美大島、沖永良部島、徳之島、屋久島下郡などの重要港や奄美群島の島々にまで及んだ。“承久の乱”とは、1221年（承久3年）に、後鳥羽上皇が鎌倉幕府執権の北条義時（1163-1224）に対して討伐の兵を挙げて敗れた兵乱である。千竈氏について『吾妻鏡』³⁰⁾には、1190年（建久元年（11月7日に源頼朝（1147-1199）が入京した時の様子が記述されているが、その上洛に従った後陣の随兵の十七番の一人に“近間太郎”の名前がある。その読み方から、その人物が“千竈太郎”であると考えられている。また、“承久の乱”の死亡者名簿³¹⁾に千竈四郎の名前があり、その解説に得宗被官となった千竈氏の一族との説明がある³²⁾。

室町時代に入ると千竈氏は島津氏の配下に入った。『海の武士団 水軍と海賊のあいだ』³³⁾によれば、千竈氏は“黒潮の領主”と呼ばれ、尾張国千竈郷を本貫地とする御家人だったが、鎌倉後期には北条得宗家の被官として得宗領の薩摩国川辺郡の地頭代官職に補任されていた³⁴⁾。得宗家とは幕府の初代執権の北条時政（1138-1215）を初代に数え、2代北条義時（1163-1224）からその嫡流である泰時（1163-1242）、時氏（120-1230）、経時（1224-1246）、時頼（1227-1263）、時宗（1251-1284）、貞時（1272-1311）、高時（1304-1333）の9代を数える呼称である。鎌倉幕府を起こした頼朝の死後、長男の第二代征夷大將軍源頼家（1182-1204）、第三代征夷大將軍源実朝（1192-1219）、頼家の長男一幡（1198-1203）、二男の公曉（1200-1219）もそれぞれ死亡し、頼朝の血流が途絶えた後、北条家が執権として幕府を支えた。

川辺郡の地頭職は北条得宗家が確保し、千竈時家はその代官職と、この頃には地頭職の下位職と思われる郡司職を兼務することで、川辺郡から収益を得ていた。千竈氏が下向したころ、現地ではもともと郡司だった河辺氏も健在であった。薩摩国川辺郡の場合、平安後期に成立した島津荘（しまづのしょう）という巨大荘園と、既存の大宰府による国衙機構とがせめぎあうことで在地の貢租が再編され、口五島・奥七島・奄美諸島からの慣例化した貢納を含め、郡司職が大きな権限を握っていた³⁵⁾。島津荘は、中世の南九州にあった近衛家領荘園、日向国（現在の宮崎県）中南部および大隅国・薩摩国（現在の鹿児島県）の3ヶ国にまたがる日本最大の荘園である。起源は、万寿年間（1024-1028）に大宰大監だった平季基（生没不詳）とその弟、平良宗（生没不詳）が日向国諸県郡にあった島津院を中心に開発し、関白・藤原頼通（992-1074）に寄進して成立した荘園のことである。但し、先述した「中世系図」を参照して作成した図2によれば、良宗は季基の次男である。季基は1026年（万寿3年）に島津荘に移住し、荘官として経営にあたった。季基は、桓武平氏繁盛流大掾氏一門伊佐氏の庶家の鎮西平氏とも、平良持（873-不詳）の子の平貞時を祖とする薩摩平氏の一族とも伝えられている。図2で示したように、忠時の次男平良元（生没不詳）の長男が秀季であり、季基の弟の良道の四男が忠景で、為朝の舅の阿多忠景（平忠景）である。

室町幕府は、成立当初から後醍醐天皇系列の南朝勢力と対立し、続いて足利家内部の路線対立から“観応の擾乱”という内部分裂を引き起こした。つねに各地での軍事的な緊張を抱えたまま、権力基盤を作り上げなければならなかったためである。“観応の擾乱”とは、南北朝時代（1350-1352）にかけて足利政権の内紛によって行われた戦乱である。将軍、足利尊氏（1305-1358）の弟で幕府の実権を握る足利直義（1307-1352）の派閥と、尊氏側近の将軍、高師直（こうのもろなお 不詳-1351）が、派閥争いを行い、最終的に師直も直義も死亡したことから、生き残った尊氏が擾乱に勝利した。実態は足利政権だけにとどまらず、対立する南朝と北朝、それを支持する武家や、公家と武家同士の確執なども背景にあった。複雑な政治状況の中で、日本全国には地域ごとの権力者が存在し、彼らもまた南朝と北朝のどちらを支持するかで立場を変えていた。室町幕府は京都に政権を置いたため、九州統治のため鎌倉時代の1293年（永仁元年）に設置されていた鎮西探題を踏襲する形で九州設探題を設置した。鎌倉に設置された鎌倉公方が関東を中心に、奥州探題が東北地方を統治し、九州探題は九州を統治した。当時の九州探題は渋川義行（1348-1375）や足利氏一門が現地に下向し、現地の軍事指揮権を掌握していた³⁶⁾。

海外に目を向ければ、九州探題は李氏朝鮮との外交なども行った。李氏朝鮮は、高麗の次の王朝にあたり、朝鮮の歴史における最後の統一王朝である。高麗は、918年に王建（太祖677-943）が後高句麗王弓裔（きゅうえい 857-918）を、易姓革命で追放することで建国した。高麗の武将李成桂太祖王（1335-1408）は高麗王・恭讓王を廃して、自ら即位した。李成桂は前政権を否定するために、高麗の国教であった仏教を否定し、“崇儒排仏”で儒教を国教化した。李成桂は、翌1393年（明徳4年）に中国の明から朝鮮王代理に正式に封ぜられ、朝鮮という国号を明の皇帝洪武帝（1360-1424）から下賜された³⁷⁾。

明国は1368年（貞治7年）、朱元璋（1358-1398）によって建国された。彼は後に自身を洪武帝と称した。中国では明の建国以後、新たに明を中心とする東アジア国際秩序が形成された。明は民間船の海外通交を原則として禁じ、明皇帝と諸国の国王間では朝貢貿易のみが認められた³⁸⁾。洪武帝死後の帝位継承の争い、靖難の役（1399-1402）で実権を握って、第三代皇帝となった永楽帝は、都を南京から北京に遷し、紫禁城を造営した。皇帝専制体制を作り上げ、経済も発展し、漢民族の文化が隆盛期を迎え、広大な朝貢世界を支配した。永楽帝は世界が明の権威を認めることを欲し、鄭和に命じ大船団を南海に派遣したが、当時、倭寇問題などで対立していた日本とも和解した。1404年（永楽2年）に室町幕府第三代征夷大將軍足利義満（1358-1408）は、永楽帝の即位を祝賀する使節を送り、貿易を求めた。倭寇とは、一般的には13世紀から16世紀にかけて朝鮮半島や中国大陆の沿岸部や一部内陸、及び東アジア諸地域において活動した日本の海賊のことであり、私貿易、密貿易を行う貿易商人に対する中国・朝鮮側での蔑称である。永楽帝は当時猛威を振るっていた倭寇の取締りを日本側に求めると同時に、義満を“日本国王”に冊封し、朝貢貿易も許した。彼は義満を高く評価しており、その死の翌年に弔問使を日本に遣わした。この関係は義満の後継者である室町幕府第4代征夷大將軍足利義持（1395-1423）が、1411年（永楽9年）に明の使者を追い返すまで続いた³⁹⁾。

『薩摩千竈氏再考』⁴⁰⁾によれば、鎌倉時代後期、1306年（嘉元4年）の千竈時家（1270?-没年未詳）による処分状によると、千竈氏の支配領域は尾張国千竈郷のほか、常陸国、駿河国、薩摩国の得宗領の代官職となっており、かなり広範囲に及んでいる。時家の処分状によれば、嫡子で長男の千竈貞保（生没不詳）は、地頭代官職井部司職として薩摩の国河辺郡の村、坊津、用作、島としては口五島、わさの島、喜界島、大島が入っている。郡司職として駿河の国浅服荘内北村郷、常陸の国杜郷は三分の一地頭代官職、尾張の国千竈郷いわくに方の地頭職などである。薩摩国の所領は、川辺郡を拠点に坊津、喜界島、奄美大島、沖永良部島、徳之島、屋久島下郡などの重要港や奄美群島の島々までが挙げられている。この処分状から見ても奄美大島およびその群島が千竈氏の支配領域であったことは明らかである。

また、次男の千竈経家（生没不詳）には、薩摩国河辺郡と尾張の国千竈郷いわくに方、そして永良部島である。三男で庶子の熊夜叉丸（生没不詳）は、薩摩の国河辺郡の村、津、用作と七島である。長女、熊姫が薩摩国河辺郡の古敷村半分と徳之島、二女の矢熊には、薩摩国河辺郡の古敷村半分等、最後に二女の矢熊の母に薩摩国河辺郡の清水村や用作が譲られた。その実態は、交易を通じての経済的権益であると推定されている。この処分状については、通常奄美群島史において“グスク時代”と捉えられていた時代に鎌倉幕府の権力が一部とはいえ及んでいたことを示すものとされている。グスク時代は、沖縄・先島諸島および奄美群島における時代区分の一つである。奄美・沖縄諸島では“貝塚時代”、先島諸島では“先島先史時代”の後に続く時代区分である。また、“グスク時代”は、グスクによって代表される考古学的な時代区分で、それ以前は歴史学者により“按司時代”と呼称されていた。開始年代は11世紀ないし12世紀頃、終了年代は琉球王国が誕生する15世紀前半、または16世紀頃までとされる。この頃は、城塞としてのグスク・按司の登場、農耕社会の確立、交易による肥前産石鍋やカムイ焼（カムイヤキ）の伝播、そして奄美から先島までの文化圏が統一され、社会的に大きく変容した時代とされている⁴¹⁾。

下図（3.4）は奄美大島に残っている赤木名城（グスク）である。赤木名城は、いつの時代に誰によって建てられたのかは不明だが、土坑には平安時代？鎌倉時代に相当するカムイ焼（かむいやき、かむいやき）という陶器、滑石・石鍋など当時の物品が発掘されている。この頃の奄美大島支配は千竈氏である。現在の赤木名城はほとんどこんもりとした森の様な山であり（図4）、左側に山の頂上に登る道はあったが、図3の左側の入り口付近にヘビに注意とヘビたたき棒が数本準備されていたので恐れをなして登れなかった。



図3 赤木名城入り口（筆者撮影）



図4 赤木名城全貌ほとんど山（筆者撮影）

また、千竈氏の奄美群島に対する権益が単なる経済的なものに止まらないとする見方もある。得宗家に直結した被官であった千竈氏は、室町時代に入ると島津氏の配下に入り、鎌倉幕府の崩壊と運命を共にした。鎌倉期に河辺郡地頭の得宗家の代官かつ同郷の郡司として河辺郡に関わりを持った千竈氏は、河辺郡の本来の郡司だった川辺氏の協力を得ながら、河辺郡に根を張った領主となり、薩摩千竈氏が成立した。千竈氏は、伊集院氏との主従関係を通して南西諸島の公益実務を掌握し、支えた。薩摩伊集院氏は島津氏第2代当主、島津忠時（1202-1272）の七子、島津忠経（生没不詳）の四子である島津俊忠（生没不詳）が、薩摩国日置郡伊集院地頭職を得たことから始まる。伊集院氏は紀貫之（866-872）に連なる紀姓の一族であるが、実際に伊集院を名乗ったのは俊忠の子、島津久兼（生没不詳）からとも言われている。一族は島津氏支流の中でも家老に上り詰めた人物もいれば、足輕身分にまで身を落とした者まで多岐に渡る。島津宗家が九州探題の今川了俊（貞世1326-1420?）と対立すると、第6代島津久氏（1328-1387）は了俊からの誘いを断り、宗家側について今川勢を破り、以後伊集院氏は島津家の中で大きな発言力を持つようになった。

そうした伊集院氏が没落すると千竈氏は、新たに河辺郡の支配者になった島津藩州家に仕え、南九州の海上交通に影響を持つ存在になった。千竈氏の事については『中世尾張千竈氏に関する一考察』⁴²⁾、『薩摩千竈氏再考』⁴³⁾にも検証されている。しかし、千竈氏は、奄美大島まで進出した琉球王国と度重なる闘いの末に敗れ、1447年（永享1年）に琉球王国4代尚思達王（1408-1449）に征服された。その160年後の1609年（慶長14年）に島津氏による琉球侵入以後、与論島以北の奄美諸島は、薩摩藩領とされ、毎年の年貢は薩摩藩に納められることになった。だが琉球国王が代替わりをし、新国王が即位するときだけは、奄美諸島からも進物や人夫などが琉球王国に貢進され続けた。

Ⅱ. 奄美大島と為朝

1. 奄美大島に残る為朝伝説

為朝は、“保元の乱”終結後に伊豆に流され、その地で自決したことになる。しかし、為朝は1165年（永元元年）に潮流に乗って南島に向かったとされる⁴⁴⁾。最初に着いたのは喜界島の小野津港であった。為朝は島の近くまで来ると住民がいるのか確かめようと雁股の矢を放った。上陸して雁股の矢を抜くとその痕から清水が湧出したので、これを雁股の水と称した（図5.6）。為朝は上陸後、一軒の家に入ると機織りをしている娘がいて、為朝の顔を見ると「御方は御曹司八郎殿にてはおわさずや」⁴⁵⁾と問いかけ、夜前夢に見た為朝卿下島の話をも語った。為朝は深く感動して、これが縁となって夫婦の契りを結び、娘はやがて妊娠した。為朝はこの不思議な縁を氏神加護の賜物と信じ、この地に八幡大菩薩を祀って深く神恩を謝し、武運長久を祈った。現在の小野津八幡は為朝の創祀したものである^{46), 47)}。

次に為朝は、西の方に大きな島影があるのを見つけ、そこへ渡った。渡ったところが奄美大島である。為朝は奄美大島の北部から西南部にかけてあまねく足跡を残した。為朝は至る所で土地の女性と関係を結び、子を成したとされる。宇検村に残る鎮姓は為朝の子孫だと言われ、先述した加計呂麻島の実久三



図5 雁股の水立て看板（筆者撮影）



図6 雁股の水（筆者撮影）

次郎も為朝の子孫だと言われている。加計呂麻島の東に鎮西村という地があるが、ここは為朝の名にちなんでつけられたとのことである。この地の子守歌に「大和城の御曹司や、左し、石んきゃ、へーあげゆん、平按司や、石んきゃ、右しへーあげゆん、わらべんきゃ、城の御曹司のいもゆんど」⁴⁸⁾ というのがある。歌の意味は、平按司が右手で石を上げるのに無法の剛力大和城の御曹司は、左手で楽々と石を持ち上げるほどの大力だ。子供たちよ泣くな、泣けば城の御曹司が来るぞよという事である。この大和城の御曹司が為朝であると言われる。時代背景から考えると平按司は、薩摩平氏ゆかりの按司か？

その後、為朝は西古見（現在の瀬戸内町）から船出し、徳之島に渡って何日か滞在した。徳之島の犬田布嶽の頂上に二個の岩石があって、一つは立ち、一つは横になっている。石の表面には弓矢の絵を掘り、古文字らしきものが刻まれているが摩滅して読み分けられない。島民は、これは為朝が渡琉の際に上陸して、行く手の航路を見定めるために、腰を下ろして沖合を眺めた石であると伝えている。また、同島天城嶽の頂上には為朝を祀った祠があるが、それは為朝が滞島中、島民の難船を救ったという恩に感じて建てたものだそうだ。

次に沖永良部に向かった。沖永良部島にも為朝が滞在した畦布の遺跡(城前ぐすくめ)がある。同島手々知名の平山家と赤嶺の龍家とは、為朝の子孫だと言われ、島内の門閥家で、薩藩時代にも藩邸から重んじられていた。既に『奄美大島歴史深訪(3) 一為家と琉球王国、そして為家と筆者との関係一』⁴⁹⁾ で報告したように、田畑家が龍家に改称したのは1785年（天明5年）の事であるから、為朝直琉と言うよりは、いわゆる為家と呼ばれる家系で、龍家に改称した以降の血筋の者達であると推測される。次に、為朝は沖永良部から一路琉球を目指した。一隊の鎧武者が琉球の運天に上陸した時、琉球島民は狼狽したであろう。為朝は間もなく琉球全島を征服して、大里按司の妹を娶り、1166年（仁安元年）に一子をもうけた。この子が琉球太郎俊天王（1166-1237）である。但し、鹿児島外史には沖永良部王になった琉球二郎と称する俊天王の弟が存在した。その後、伊豆の大島に帰ることを決意したが、妻子を乗せた船が嵐に会い、一人で帰島した。

帰島して間もなくの1170年（嘉慶2年）、先述した伊豆の工藤茂光に攻められ、応戦したが敗れて後、自刃した。時に為朝32歳であった。茂光は、平安時代末期の武将・豪族で勢力範囲は山がちではあったが、伊豆国を代表する牧草地だった牧之郷を領有していた。その地は、良馬を多数有したため伊豆半島最大の勢力を築き、伊豆大島も所領していた。やがて為朝が流人の身でありながら周辺諸豪族を切り従えて自立の動きを見せたため、茂光は、1170年（嘉慶2年）に為朝を追討し自害に追い込んだとされる。しかし、先述したように、為朝が南島に向かったのは1165年（永萬元年）の事であるとしたら、その年から1170年（嘉慶2年）までの5年間は、実は行方不明の時期である。むしろ、不在の間は良かったが、帰島した為朝の存在は大きな不安因子であったと考えられる。

2. 『鹿児島外史』に見る源為朝と田畑家

伊賀倉俊貞著の『校正鹿児島外史巻ノ五』⁵⁰⁾ によれば、為朝は、薩摩平氏の一人である阿多忠景（平忠国）の娘婿として三男一女をもうけたとされる。先述したように為朝は13歳の時、乱暴が過ぎて父の

為義に勘当され、九州に追放された。九州に下った為朝は、尾張権守家遠が後見となって豊後国に住んでいたが、後に肥後国阿蘇郡の忠景の婿となった。『校正鹿兒島外史巻ノ五』には図7で示したような為朝の家系図が示されている。為朝の正室として阿多忠景（平忠国）の女と記載されているが、この女という表記は娘の事である。古い時代には女性について娘であれば父親の姓名の後に女、妻であれば夫の姓の後に妻と表記され、氏名は記載されない。

余談ながら、『校正鹿兒島外史巻ノ五』によれば、図7の右下に示した源頼朝（147-1199）と比企能員（よしかず 不詳-1203）の妹丹後局（生没不詳）との間に生まれた子供が、島津家初代島津忠久（1179-1227）であると記載されている。『校正鹿兒島外史』は、第一巻から第五巻まであり、1885年（明治18年）に出版された。著者の伊賀倉俊貞は、鹿兒島士族で、薩摩藩公認の歴史家である。彼は、第11代薩摩藩主島津斉彬（1809-1858）の命によって薩摩藩の歴史を編纂した。1933年（昭和8年）出版の『頼山陽先生：百年記念』には「伊賀倉俊貞の暴説」⁵¹⁾ という論評があるが、特に為朝の嫡男説を名指しで否定している訳でもない。頼山陽は、歴史家で大著『日本外史全22巻』がある。ちなみに頼山陽は父親が広島県出身である為か、広島市内に頼山陽史跡資料館があり、竹原市に銅像がある。

為朝に話題を転じるとまず、為朝の長男為頼（生没不詳）は、大島士族鎮西大島太郎、琉佐分仁家祖（生没不詳）となっている。本文中、系図の説明には、「為朝ノ嫡男為頼ハ鎮西ノ太郎大島ノ冠者ト称ス迺チ鎮静家ノ女ノ産ム所ニシテ而シテ驍武父ニ等シ琉彊ニ入りテ大島ヲ領ス子孫世々冠里（かさり）ノ大親タリ今大島瀬名縣（まぎり）龍郷方酋長外城郷士格龍佐分仁ト称スル者ハ嫡流也」⁵²⁾ と言明している。つまり、為朝の嫡男為頼は、鎮西家（忠景）の娘との間にできた子供であり、流佐分仁（生没不詳）と称して、笠利間切りの親方として大島地方を領した。現在の龍郷方の龍佐分仁と称する者は、その嫡流であるとのこと。伊賀倉が『校正鹿兒島外史』に着手したと思われる当時、第17代田畑為勝（佐文仁 1773-1858）が当主であった。田畑家が、第8代薩摩藩主島津重豪（1745-1833）の命により、龍姓に改名したのは1785年（天明5年）である。伊賀倉が『校正鹿兒島外史』の編纂を開始した頃、田畑家は既に龍家に改姓している。ゆえに、伊賀倉が著書で示した龍郷方郷士格と述べた龍佐分仁は第17代田畑（龍）為勝（佐文仁）に相違ないと筆者は確信する。

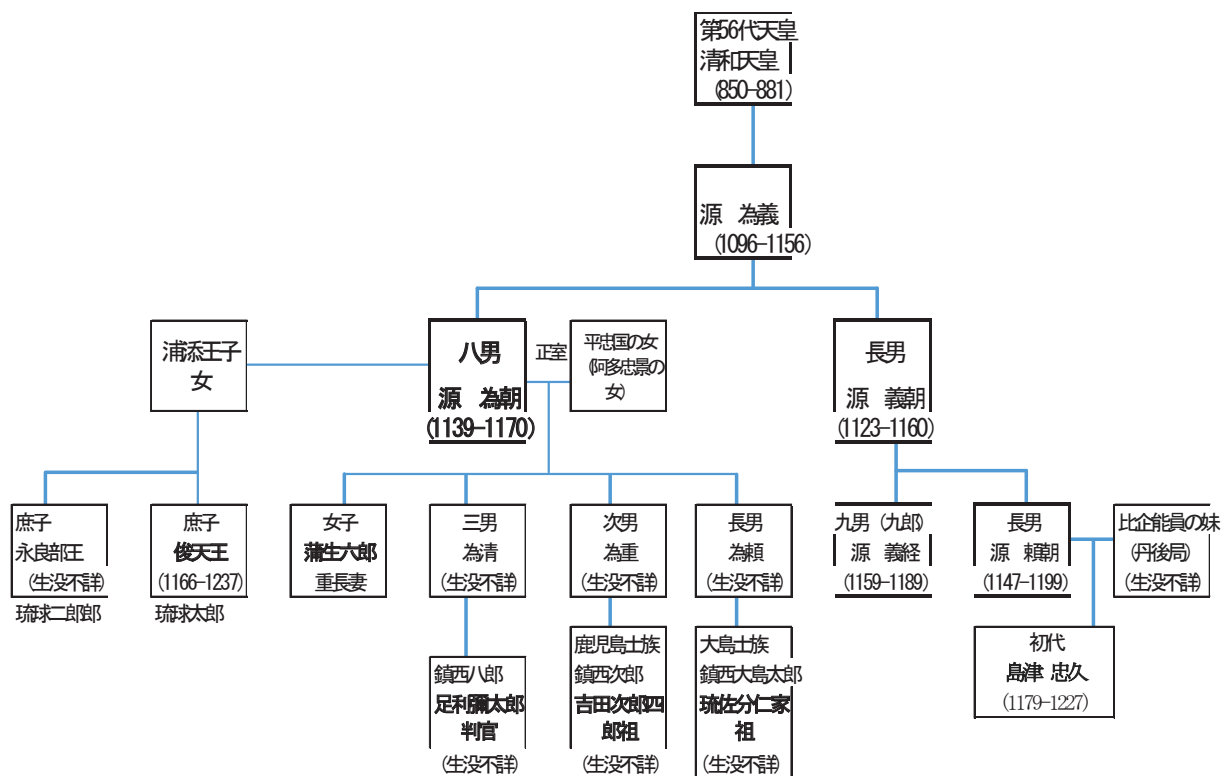


図7 鹿兒島外史にみる為朝の子孫（筆者作成）

と同時に、『校正鹿児島外史』の内容にも関わる『笠利氏家譜の解説』⁵³⁾を書いた田畑勇弘氏は、為家（笠利、田畑、龍家）が、琉球王国の俊天王の末裔と言うよりも為朝の正室の子の嫡流であるとの見解を示している。驍武とは強く勇ましいことであるが、琉彊の彊は強いという意味である。つまり、琉佐分仁という人は為朝の孫にあたり、為朝同様に勇敢で強い人物で琉球王国王族の元で代々笠利地方の大親方として統治をする役職を担ったということであろう。従って、琉佐分仁は家祖として、笠利地方に大親方として存在し、1504年に為春（佐仁1482-1542）が笠利を冠して初代としたのではないかと推測する。

次に次男為重は鹿児島士族鎮西次郎 吉田次郎四郎⁵⁴⁾の祖となっている。吉田次郎四郎をWEB検索すると、吉田清孝（生没不詳）になる。彼は安土桃山時代から江戸時代にかけての武将であり、島津氏の家臣であるとか。ゆえに鹿児島士族には違いないが、祖先は息長氏（おきながうじ）と記述されている。息長氏は、天武天皇が、豪族を新たに八種にランクづける八色の姓を制定した際にその最高位の“真人”を賜ったとされ⁵⁵⁾相当位が高い。清孝は、大隅正八幡宮（現・鹿児島神宮）神官の任にあり、為朝の次男・為重より大隅国吉田院を譲られ、吉田氏を称した。吉田城14代当主で祖父の吉田位清（不詳-1517）は、島津宗家への謀反を理由に13代当主、島津忠隆（1497-1519）に攻められ居城の吉田城は落城、逃亡途中で島津安久（1490-1527）に討たれたため没落した。しかし、位清の室（妻）が島津氏15代当主島津忠良（1492-1566）の姉という縁もあってか、位清の子、吉田宗清と弟の清親は島津貴久（1514-1571）に仕えたと説明されている。源為朝の次男為重より大隅国吉田院を譲られたという事になると、為重が大隅国吉田院を自分の息子に譲ったのか、他人に譲ったのか明確ではない。

次に三男の為清は、鎮西八郎足利彌太郎判官であり、鹿児島士族の日高次郎左衛門（生没不詳）は嫡流であると記述されている。判官と言うのは律令制における役職の事で、現在で言えば裁判官のような立場である。足利彌太郎や日高次郎左衛門でWEB検索しても手掛かりは得られていない。為清という名前は『吾妻鏡』にも見いだせるが、それは、藤原為保（生没不詳）の申し出で「阿波の国久千田庄は、父の為清（生没不詳）法師が代々受け継いだ所領である」⁵⁶⁾との訴えである。為保は後白河院の近親で、父親の藤原為清（生没不詳）は久千田庄（現在の徳島県阿波）を所領していたそう。地理的にみても『吾妻鏡』に記述された為清は、為朝の三男の為清とは無関係のように思える。為清は、鎮西八郎足利彌太郎判官を祖として、この頃、薩摩の地に島津宗家との関りを持ちながら、鹿児島士族の日高次郎左衛門という名前で実在したのであろうか。また、清和源氏の系図には、その支流として新田氏や足利氏の名前がある⁵⁷⁾。

最後に為朝の娘は蒲生六郎重長の妻になり、その娘が頼朝の長男、源頼家（1182-1204）の側室になったと記載される。夫の蒲生六郎重長についてWEB上で検索すると、清和源氏の流れである賀茂重長という人物が検索され、同時に足助重長（あすけ しげなが 不詳-1181）という人物に突き当たる。賀茂重長と足助重長両者は同一人物で賀茂が蒲生になったのか。重長は、源義朝（1123-1160）に忠義を尽くした武士として紹介される。義朝と言えば為朝の長兄であり、頼朝の父親である。ゆえに、重長は、義朝死後も恐らく、頼朝の近くにいたと推測される。賀茂重長の娘が辻殿であり、頼朝の嫡男の長子頼家（1182-1204）の正室だったとされる。辻殿と頼家の次男が八幡宮第四代代表の公暁（1200-1219）である。北条政子（1156-1225）は頼家の遺児で、孫でもある公暁（善哉ぜんざい）が病弱であったため天台宗の僧公胤僧正（1145-1216）に弟子として預けた。『吾妻鏡』にも、公暁の母親である辻殿の父は三河源氏の足助重長（賀茂重長）で、母は源為朝の娘であると説明されている⁵⁸⁾。しからば、蒲生六郎重長、足助重長と賀茂重長はやはり、同一人物か。

1219年（承久元年）、20歳になった公暁は、誰かに教えられたのか、そそのかされたか、“親の敵は討つぞ”と叫びながら鶴岡八幡宮に参詣した叔父の第三代征夷大將軍源実朝（1192-1219）を殺害した。実朝は頼朝と政子の次男で、長男の第二代征夷大將軍源頼家没後に第三代征夷大將軍の地位にあった。実朝を打った公暁は翌日には長尾新六定景（生没不詳）によって打ち取られた⁵⁹⁾。また、それ以前に、頼家と比企能員の娘との間に長男として生まれた一幡（いちまん1198-1203）も、5歳の時に義時の配下に殺害されている。太平に災いを及ぼす子供であるとの神託があったゆえにである。NHK大河ドラマの『鎌倉殿の13人』は比較的『吾妻鏡』に忠実にドラマ化されていると考えられるが、従来とは違った義経像の描き方や頼家の病气から殺害に至る過程、公暁の実朝暗殺に至る過程や公暁の殺害に至る過程などは

大義があるようでないようで不明な点が多く、もやもやした感がぬぐい切れないでいた。『吾妻鏡』を読んでも、頼朝死後の家来たちの争いの中で陰謀がうごめく感がした。以降、頼朝の子孫が途絶え、北条氏の権力が増し、御家人同士の争いも多く、約150年間継続した鎌倉幕府も終焉を迎えた。鎌倉幕府時代の内、源氏の政権は29年と短命であった。

ところで『平家物語』の平氏系図には政子の父、北条時政(平時政1138-1215)、絶えず源義経(1159-1189)を誹謗・中傷した梶原景時(1140-1200)の他 NHK 大河ドラマの『鎌倉殿の13人』に登場する家来たちの中に、平氏系図に掲載される人物たちが多く存在する。結局、頼朝が目指した鎌倉幕府は平氏の手落ちたのか？

最後に、『校正鹿兒島外史』によれば琉球の浦添王子の娘との間に庶子、琉球太郎中山王俊天王(1166-1237)と、琉球二郎沖永良部島嫡家平民鎮南山平安山、庶門士族琉嘉美坐祖となっている。俊天王は勿論、琉球王国国王であるが、もう一人は永良部王である。

Ⅲ. 琉球王国と為朝伝説

1. 『琉球神道記』にみる為朝

『琉球神道記』⁶⁰⁾には、為朝に関する記述部分がある。『琉球神道記』(図8)の著者袋中(1552-1639)は江戸時代の浄土宗の学僧である。しかるに内容の多くは、仏教の開祖と言われる釈尊(紀元前7世紀-紀元前5世紀)や建立された仏寺などに始まる仏教の説明が多い。『琉球神道記』によれば、琉球王国のはじまりとして、昔、この国のはじめ、まだ人のいない時に、天から男と女の二人が下りた。男をシネリキュ、女をアマミキュと言い二人は天帝の子供である⁶¹⁾。二人は小屋を並べて住んだ。この時、島は小さくて波に漂っていた。そこでダシカ(アカネ科)という木を現して、それが繁殖して山の形を作った。次にシキュ(ススキ)という草を繁茂させ、またアダン(浜辺等に見られる樹木)という木を植えてようやく国の形をなした。女が妊娠した。ついに三つ子を生んだ。一人目は所々の主の初め、二人目は祝(ノロ)、三人目は土民の始めである。この時、国に火がなかったので龍宮から火をもらって来て、国が完成し、人間が成長して、守護の神が現れたというものである。長男は“天孫氏”と名乗り、国の主として25代(0-1166)まで統治した。奄美大島創設神話と若干似ているが奄美では、女神の阿摩弥姑(アマミコ)と男神の志仁礼久(シニレク)が天から降りて来て、奄美大島を創ったとされる。二人目として生まれた祝(ノロ)と言うのは、女子の神官の事である。『大奄美史』によれば、琉球王国では長官に任命された妻若しくは姉妹をノロに任命し、一切の神事祭式を司らしめ、政治上に利用して女人政治を行った。琉球王国で最もノロが政治上に勢力を有したのは三代尚真王(1465-1527)の時代である⁶²⁾。



図8 袋中の琉球神道記

奄美大島でノロを置いたのは琉球王国に服属した頃であろうとの見解が『大奄美史』には示されている。『奄美大島におけるノロ祭事空間の継承状況に関する研究』⁶³⁾にも、同様見解がなされている。奄美大島におけるノロ制度は琉球王国の正真王の時代から薩摩藩の侵攻があった1609年(慶長14年)以降、薩摩藩から中止命令が出される迄続いたとされる。3人目の土民と言うのはその土地に土着している民のことである。天孫氏が国王に即位した年を起原とし、25代目にあたる1886年(淳熙13年)、臣下の利勇に殺害され、王位を奪われた。天孫氏の寧王女が悪人を前にして往生している頃、鎮西八郎為伴(為朝)が、琉球国に来て逆賊を威圧した⁶⁴⁾とある。その次に為朝について論じているのは沖の権現であり、為朝が琉球国を治めるときに建立されたであろう⁶⁵⁾と書かれている。この著作から言えることは為朝が琉球にやって来て天孫氏に危害を加えた李勇という悪人を成敗し、琉球王国を治めたことがあるという事である。

余談であるが、この著作の中には呉市阿賀の神田神社に祀られている神功皇后（169-269）についても論じられている⁶⁶⁾。神功皇后は、日本の第14代天皇仲哀天皇（149-200）の皇后であり、天皇が崩御した後、天皇に初の女帝として即位したとされる。次に『源為朝伝説』⁶⁷⁾には、琉球入りした為朝が琉球王の逆進を除いて、息子舜天丸（1166-1237）を王位につけた。先述したように舜天は初代琉球国王と位置づけられている。つまり、舜天は天孫王朝25代の末期に琉球に渡った為朝を父とする出自伝説をもつが、舜天と彼を含む王統に関しては伝説上の人物と考えられている。舜天は15歳で浦添按司となり、その後、天孫氏を滅ぼした逆臣・利勇を討ち、22歳で琉球国中山王に即位したとされる。だとすれば、為朝は即位に関与できない。舜天15歳は1181年（養和1年）、22歳は1189年（文治5年）、為朝は既に他界しており、中山王国の成立は1350年（観応1年）からである。

2. 『椿説弓張月』に見る為朝

瀧沢馬琴（1767-1848）の『椿説弓張月』⁶⁸⁾はファンタスティックな物語であり、主人公は為朝である。つまりはあの『ベルサイユの薔薇』⁶⁹⁾に描かれたフランス革命前から革命前期のベルサイユを舞台にした歴史的事実を背景に、フランス国王ルイ16世（Louis XVI 1754-1793）や王妃マリー・アントワネット（Marie-Antoinette-Josèphe-Jeanne de Habsbourg-Lorraine 1755-1793）等、実在の人物と、オスカルとフランス王妃マリー・アントワネットとのラブロマンス、あるいは男装の麗人アンドレのような実在しない人物を登場させる等、作者の創作が加わった漫画の様にである。『椿説弓張月』によれば、為朝は白縫という女性との間に舜天丸という息子をもうけた。

その後、嵐に遭遇、白縫は入水し、子どもも行方不明になった。琉球国に渡った為朝は、白縫にそっくりの寧王女（ねいわんにょ）に出会い、心惹かれた。為朝は寧王女と共に逆臣の利勇という人物を排除する。李勇は、琉球王国天孫氏25代を滅亡させた実在の利勇がモデルである。為朝は、為朝と白縫との間にできた舜天丸とは、嵐の日以来別れ別れになっていたが、沖の孤島で老人と暮らしている舜天丸と再会した。王位の座が空白のままであったので、寧王女は、舜天丸に国王の座に就くよう依頼した。そして舜天丸が王位に就き、舜天国王（1166-1237）となり、為朝と寧王女が昇天するという内容である。寧王女をWEB検索すると、確かに実在しているが、第二尚氏尚寧王（1564-1620）の王女であるとされる。尚寧王は第7代の国王であり、年代がかなり違う。最も、洋の東西を問わず、名前を繰り返す傾向はいつの時代にもあるので、存在しなかったとはいえない。以降、奄美大島は、1269年（文永6年）に英祖王が奄美大島を服属させ、千竈氏が1447年（文安四年）に琉球王国との闘いで敗れ、奄美大島は、完全に琉球王国の支配に移行、薩摩が侵攻する1609年（慶長14年）までの約340年間琉球王国に統治された。1609年から明治維新まで薩摩藩による統治時代があったので、次は琉球王国と島津氏の歴史とを重ねながら、奄美大島と琉球国との関係についても改めて論じておきたい。



図9 瀧沢馬琴の『椿説弓張月』
文献番号67)より

3. 琉球王国成立と奄美支配、そして島津家

天孫氏を起源として天孫王統は1186年（文治2年）まで続き、臣下の李勇に国王が殺害された後は、為朝の子とされる舜天が1187年（淳熙14年）に国王に即位した。舜天王統は、図10に示したように舜天、舜馬順熙（1238-1248）、義本（1249-1259）まで続いた。そのあとは、為朝とは血族関係のない英祖王統が祖英祖王（1260-1299）、大成（1300-1308）、英慈（1308-1313）、玉城（1313-1336）、西威（1336-1349）迄5代つづいた。この英祖王統時代の1266年（文永3年）に琉球王国は、大島群島を始めて服属させた。歴史的にみるとこの頃の奄美大島は、鎌倉幕府御家人の千竈氏が統治していた頃であると思われるが、

英祖王は1267年（文永4年）から奄美大島に按司を派遣した。按司とは琉球王の代理人である。そして大島本島の笠利町の赤木名を琉球王国時代の大島の首都とし、赤木名を筆頭に13の間切（行政区分）において管理した。今に残る赤木名城（グスク）はこの時代の名残であろうか。それぞれの間切りには大親方（ウェーカタ）を一人ずつ置いた。大親方とは琉球士族が賜ることのできる最高の称号で、大臣や長官職にあたる。

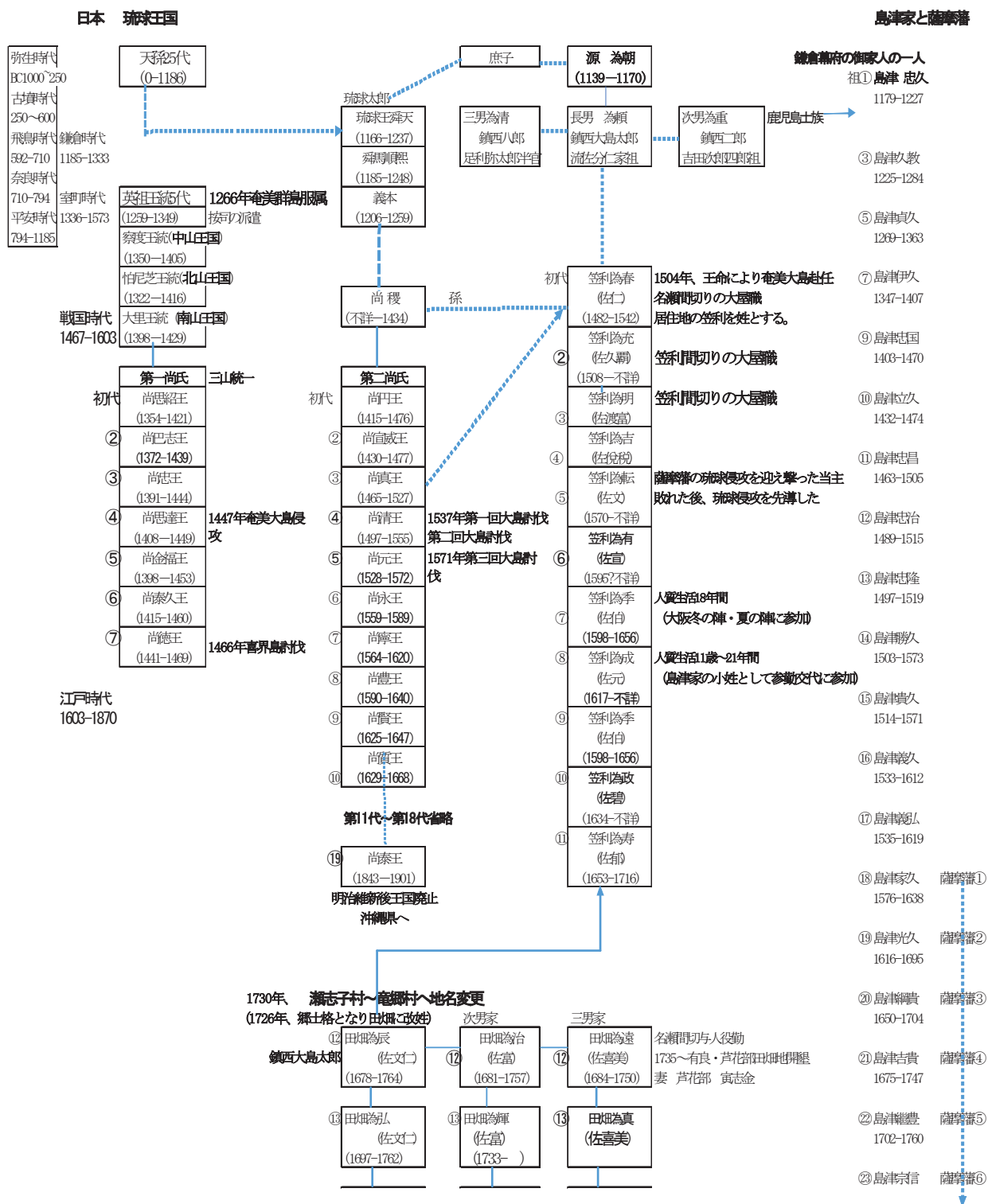


図10 源為朝の子孫と言われる琉球王国から笠利家、そして島津家の系図

次に、中山王国、北山王国、南山王国の三山王国が確立された。一説によれば中山王国の国王になったのが舜天であるとも言われるが、時代背景に相違がある。中山王国の察度王統は、察度（1321-1395）、武寧（1356-1406）までである。北山王国の怕尼芝王統が怕尼芝（1322?-1395）、珉（不詳-1400）、攀安知（不詳-1416）までである。この北山王国は与論島と沖永良部島も支配勢力を拡大、これに加えて徳之島・奄美大島・喜界島まで北山王の領地であったとも言われている。沖永良部島には為朝の子で俊天の弟の永良部王が統治していたと思われるが、戦いに敗れ、北山王国に征服されたのであろうか。次に南山王国の大里王統が承察度（1337-1396）、汪英紫（不詳-1402）、汪応祖（不詳-1413）他魯毎（不詳-1429）まで続いた。北山・中山・南山の三山王国も又、内紛を繰り返し、全国統一を果たしたのは第一尚氏王統である。

1393年（明徳4年）、当時伊覇城を拠点としていた伊覇按司一世の推挙を経て父尚思紹の後を継ぎ、南山の佐敷按司となった尚巴志（1372-1439）は、1406年（応永15年）、中山王武寧を攻撃して察度王統を滅亡させ、首都を浦添から首里に遷した。また父の尚思紹を中山王に即位させ、初代尚思紹王（1354-1421）とした。次に、尚巴志は1416年（応永23年）に、北山王攀安知を倒し、次男の尚忠を北山監守として北部の抑えにした。北山王を亡ぼしたことによって北山国に属していた与論島と沖永良部島などの領地を加えた。1421年に父の尚思紹王が薨去した後、尚巴志は、1422年（応永29年）に即位し、2代尚巴志王になった。1429年（永享1年）、南山王他魯毎（不詳-1429）を滅ぼして第一尚氏王統による琉球王国最初の統一王朝を成立させた。在位中に首里城を拡張整備し、王城にふさわしい城とした。

この後、3代尚忠王（1391-1444）、4代尚思達王（1408-1449）と続き、この4代尚思達王の時代、奄美大島を所領としていた千竈氏と、奄美大島まで進出した琉球王国とは度重なる争いがあったが、千竈氏が破れ、1447年（永享1年）に尚思達王が奄美大島を征服した。そして、5代尚金福王（1398-1453）、6代尚泰久王（1415-1460）、7代尚徳王（1441-1469）まで7代63年間は第一尚氏の時代である。7代尚徳王は喜界島が年貢を怠ったことを理由に、喜界島を攻略するため1450年（宝徳3年）から1462年（寛正2年）までの12年間、ほぼ毎年喜界島への攻撃を仕掛けた。

1466年（成化2年）に尚徳王は、自ら3000の兵を率いて喜界島に遠征、これを制圧し、琉球王国はようやく奄美群島全域を琉球王国の支配下に置いた。琉球王国の大島支配体制は、全域支配の成った1466年（成化2年）からであり、奄美群島各地に年貢の納付を改めて命じた。時に日本は室町幕府から戦国時代に至って国内は騒乱時代であった。この頃、琉球使節が室町幕府（1336-1573）の将軍、足利義政（1449-1474）に謁見している。室町時代中期の“応仁の乱”（1467-1477）後、幕府は島津氏に商人の往来の統制を命じ、琉球へは交易船の派遣を要請した。

第二尚氏王統の時代になると又、為朝の子孫との関係が再燃する。まず、初代尚円王（1415-1476）の父尚稷（不詳-1434）は、為朝の子供の舜天王統の最後、義本（1206-1259）の血脈で舜天の孫にあたるとされる。つまり、尚稷の子である第二尚氏王統の初代尚円王も為朝の血筋であり、2代尚宣威王（1430-1477）、3代尚真王と続いた。尚真王は、中央集権体制を確立した事であり、第二尚氏王統の権力基盤を安定させたことである。彼は、各地を割拠して力を持っていた地方の按司を首都の首里に集居させ、中央集権化を図るとともに、地方には按司掟という役人を派遣して領地を管理させた。尚真王の政治的成功の鍵は「祭政一致再組織化」⁷⁰⁾として、先述したノロ（神官）を利用して精神的統一を企て、宗教を利用してこの政策を実行したことだとされる。女官長には、代々王妃または王妹を任官し宗教上の君主とした。さらに、進貢貿易を中心に中国、日本、東南アジアと広く交易するなどして、王朝の全盛期を迎えた。初代笠利為春が国王代理として奄美大島派遣は1504年（文亀4年）の事とされるから、尚真王によって派遣若しくは現地で任命されたと考えられる。しかし、明国や薩摩藩などとの関係において次第に国力が落ちた。

次は、4代国王は尚清王（1497-1555）である。この尚清王の時代、第二尚氏として1537年（天文6年）に初めて第一回大島討伐⁷¹⁾があった。討伐目的は、尚清王より大親に任命された与湾大親（不詳-1537）に関わる事柄からであった。彼は奄美大島在地の豪族で、琉球王国に忠誠を誓い、善政を敷いた。しかし、他の大親からの妬みを買って、反逆の企てがあると王国政府に讒訴された。尚清王は軍の総大将に根差部親方を任命し、与湾追討軍を大島に派遣した。軍が上陸すると与湾大親は自ら縊死し、その息子の糠中

城（ぬかなかぐすく）は琉球へ連行されたということである。同年には名柄親方と諸鈍酋長兄弟が横暴を極めたとして彼らの討伐目的で第二回大島討伐を行った⁷²⁾。

続いて5代尚元王（1526-1572）は1556年（弘治2年）に即位したが、明との交易上問題となったのは、倭寇と呼ばれる勢力で、非合法的な東シナ海交易の担い手として活性化していたことであった。琉球国国王として冊封されるために明の皇帝の使者を迎えるにあたっては、その湾岸警備上の問題があった。倭寇問題も含め、尚元王は島津貴久（1514-1571）と良好な関係を保持した。大友宗麟（1530-1587）の倭寇禁圧の体制に島津氏も組みこまれており、明との関係を維持したい琉球王国にとって島津氏との連携は必然であった。だが明の後押しによって進められたこの体制は雲散霧消していった⁷³⁾。この尚元王の時代、1571年（天亀2年）に第三回大島討伐があった。この大島討伐は琉球王に対する反乱の兆し有とのことであったが、海上における略奪行為などの暴挙も続いたことによる。尚元王は自ら大軍を率いて大島の笠利に上陸した。笠利では大激戦になったが、これを平定した。しかし尚元王は現地で重い病にかかり、帰国後、ほどなく逝去したとされる。

次は6代尚永王（1559-1589）の時代に入る。島津氏は1573年元亀4年（天正元年）に琉球国に使者を出したが、尚永王は礼を欠いた。日本は豊臣秀吉（1537-1598）の時代であり、島津氏は豊臣政権に服属していた。1589年（天正17年）、豊臣政権側から島津氏に求められたのは、①巢鷹の進上、②琉球使節派遣の調整、③大仏殿造営用の材木の進上、④刀狩りの実施、⑤明国との勘合復活への調整、⑥倭寇船の取り締まりであった。①巢鷹の進上とは鷹を献上することであり、③④も含め特別なるものではなかったが、明と琉球王国に関連する求めは、琉球の仲介が不可欠であった。事の成就にあたっては、様々な画策が行われ、琉球問題において島津氏は滅亡しかねない状態に追い込まれていた。尚永王は島津氏の苦心も秀吉の外交問題依頼をも無視し、明との親交を深める等、豊臣政権にとっては侮辱ともとれるようないくつかの事柄が起きた。豊臣勢が琉球王国を討伐しかねない事態に追い込まれたが、時代は7代尚寧王（1564-1620）に移っていった。

『大奄美史』⁷⁴⁾によれば、この尚寧王の時代1609年（慶長14年）、島津氏は、明との関係が強かった琉球王国を征伐するという決断に至った。まず、奄美大島に3000の兵で来島した。大將は島津家の家老、樺山久隆（1560-1634）、副将は平田増宗（1566-1610）であった。当時、奄美大島の琉球王国派遣の統治者は、第5代笠利為転（1570-不詳）であった。奄美大島の首府は笠利町笠利にあったが、薩摩の進軍に対し、特別なる戦闘もなかった。容易に歩を進めた薩摩藩は、次に徳之島に入った。この地では一部の者が抵抗したが、速やかに制圧されたようだ。その後、薩摩の軍勢は琉球王国本島に攻め入った。薩摩藩の琉球侵攻を迎え撃つも大敗北を喫した。そして、尚寧王は薩摩藩に連行されるという事態になった。

翌、1610年（慶長15年）、尚寧王は、薩摩藩初代藩主島津忠恒（1576-1638）と共に江戸へ向かった。島津家は1602年の関ヶ原の戦いで父の島津義弘（1535-1619）が豊臣方に属したため、忠恒は徳川家康（1543-1616）に謝罪のため上洛した。その途上、駿府で家康に謁見した。忠恒は、家康から家久の名前と琉球の支配権を承認されたほか、奄美群島を割譲させ直轄地とした。そして、家久として初代薩摩藩主となったのである。江戸城では徳川秀忠（1579-1632）に謁見した。薩摩藩は琉球王国の第二尚氏を存続させながら、那覇に在番奉行所を置いて琉球王国を間接支配するようになった。これ以降、琉球王国は、8代尚豊王（1590-1640）、9代尚賢王（1625-1647）、10代尚質王（1629-1668）、11代尚貞王（1645-1709）、12代尚益王（1678-1712）、13代尚敬王（1700-1751）、14代尚穆王（1739-1794）、15代尚温王（1784-1802）、16代尚成王（1800-1804）、17代尚灝王（1787-1834）、18代尚育王（1813-1847）、19代尚泰王（1843-1901）まで、19代、410年間続いた。各王の生存期間は平均で46歳、最も長命は11代尚貞王の64歳、短命は3歳である。そして、尚稷の孫であるとされる笠利氏は為朝の血筋であるとされるが、なぜか第二尚氏の王統には入っておらず、姓も金丸ではなく笠利なのが筆者としてはまだ合点がいない。やはり、彼は、為朝から俊天に至る系統の血筋ではなく、為朝の嫡男為頼の長男である琉佐分仁を家祖として奄美大島を代々支配、1504年（永正1年）に尚真王から琉球国国王代理として任命された時に、笠利の地名を冠して笠利為春（佐仁1482-1542）と称して初代としたのではないかと考えられる。

日本は明治維新を迎え廃藩置県が実行され、武士社会が終焉を迎えた。1872年（明治5年）に、日本政府は、琉球国王19代尚泰を琉球藩王に封じて華族とし、東京に藩邸を与えた。そうして1879年（明治

12年)の琉球処分により琉球藩に沖縄県が設置されると、藩王の地位は無くなり、居城の首里城も出ることとなり、琉球藩は消滅した。そして、維新政府の廃藩置県政策から、1879年(明治12年)には、清国との関係を絶つことと、首里城を明け渡すことなどの命令がほとんど武力によってなされ、琉球王国は終止符を打ち、沖縄県に改称された⁷⁵⁾。

奄美大島は、1266年(文永3年)から1609年(慶長14年)までの340年間、琉球王国支配時代があったが、この時代は薩摩藩統制時代の1609年(慶長14年)から1871年(明治4年)までの260年間に比して『奄美大島歴史深訪(2) 一島民を苦悩させたサトウキビと家人(ヤンチュ) 制度、そしてケンムン伝説一』⁷⁶⁾で報告したような奄美大島島民の生活を脅かすような事態には陥っていなかったように考えられる。

おわりに

本論では、特に為朝に由来する事柄を中心に、為朝を継承する親族たちという意味で奄美大島と関係すると思われる為朝の三男一女、そして琉球王国の俊天国王も含めて可能な限り検証した。為朝の正室とされるのは阿多忠景の娘であるが、彼は、桓武天皇由来の薩摩平氏であり、為朝は清和天皇由来の源氏である。両氏は源平の闘いのみならず多くの闘いで血を流した間柄ではあるが、為朝と阿多の娘と婚姻して三男一女を儲け、幸せに暮らしましたというハッピーエンドで終わるドラマのように事は進まなかった。為朝は生来の武士気骨ともいべきか闘いの為に生まれたような人物であり、惜しまれながらも自決するという生涯を終えている。そして、3人の男子の一人が龍家に、残る二人は十分な検証ができにくかった。為朝の一女は辻殿と呼ばれる娘を生み、その娘が鎌倉幕府第二征夷大将軍の頼家の妻となって公暁を生み、歴史の表舞台に登場、何の因果か叔父の実朝を殺害するという凶事に及んだという事実があった。

そして、庶子と言われる俊天は、琉球王国国王と言う地位を得ている。琉球王国も奄美大島も歴史上、為朝伝説を肯定していることである。伝説は口頭伝承の形を取ることから送り手と受け手の間の伝達経路の中に複数の人物が介在すると内容が変わってしまう事は日常で良く経験することである。ゆえに、一つの伝説に頼ることなく、多方面から論ずることが必要だ。神話の世界も同様である。伝説とは言え、伝説の中に真実や嘘が含まれることから歴史的には一部が史実に基づくと考えた方が良いのではないかと。これは筆者の為朝とつながっていたい願望がそう考えさせるのかも知れないが。そうでなければ“インタビュー”や“オーラル”による研究は成り立たない。

これらの歴史研究過程において、どこかつながっている人々が権力争いに巻き込まれながら、命を落としていたこと、そして、そのことが武士道として実直で剛直な精神を作り上げたことは必然的であったと理解できた。現在の職業軍人が国防の為に外敵と闘う必要があるのと同様、為朝の時代の源・平武士もやはり、闘わずば武士ではなく、戦うための要員であったのであろう。

奄美大島は、歴史上、無風状態でそこにあって今に至るのではなく、絶えず外界からの影響を受けた。平安時代には薩摩平氏、為朝の来島と統治、そして1203年には平家落人の侵攻、鎌倉時代には千竈氏の統治、そして琉球王国の支配下に置かれた。そうした支配者が変わる都度に奄美大島はその時代背景と支配者達が有する文化的・政治的影響を受けた。琉球王国も明との従属関係や薩摩藩との軋轢、そして明治維新後の廃藩置県による沖縄県に至る経過の中で悲哀を味わったが、奄美大島も繁栄と衰退を味わった。奄美大島の歴史という意味では、この支配者たちとの関係のみでは終われない様々な問題が潜んでいると筆者は考えている。更に、奄美大島研究の契機になった琉球三味線であるが、その検証も十分ではない。琉球国王が創らせたと言われる5つの三味線の内3棹は博物館に収納され保管されているが、2棹は行方不明であるとのこと⁷⁷⁾。もし、三味線2棹が紛失したとしたら、明治維新以降の廃藩置県政策の中で琉球王国から沖縄県に首里城が開放された時ではないかと筆者は推測している。本件を解決する糸口として次は奄美の博物館を訪ねる予定である。

余談ではあるが、為朝の娘の嫁ぎ先を検索する過程において、奄美大島には蒲生神社があり、蒲生左衛門という人物が存在したが重長との関係は見いだせなかった。蒲生左衛門は平行盛(不詳-1185)が奄美に侵攻した時に敵の来襲に備えて蒲生崎に設置した見張り台の見張り番である。



図11 蒲生氏家紋 (Wikipedia)



図12 榮原家家紋

次に大阪市に蒲生という地域があることから蒲生氏について検索すると、日本の氏族で代表的な一族に近江蒲生氏という藤原秀郷（891-958）を祖と称する藤原北家の一族と、大隅蒲生氏という藤原教清（生没不詳）の後裔と称する藤原北家の一族がおり、それぞれに系図があったが、蒲生六郎重長という人物は存在しない。蒲生氏は秀郷の系統に属する鎌倉時代からの名門で、秀郷は先述した将門の乱で、将門を討った武将だそうだ。

驚いたことに蒲生氏家紋が筆者実家の榮原（旧榮）の“むかい鶴”と読んでいる家紋とほぼ同じであった（図12）。榮原の家紋は額縁の中に収められているものを写真撮影しているのも黄ばんで見える。珍しい家紋で他にはほとんど見かけない家紋である。近江蒲生氏で会津藩の城主蒲生氏郷の家紋は図11に示した“対い鶴（むかいつる）”である。

氏郷の幼名は鶴千代と言い、会津城改築の際に、自身の幼名である鶴千代の名前を取って鶴ヶ城としたそうだ。歴史とは全く不可思議なもので、一人のあるいは一つの事を検証するとまた、その中から新たな事実が発見される。琉球三味線のルーツから奄美大島の歴史と筆者のルーツを検証する過程において母方の龍家については多くの手がかりを得たが、父方の系図はさっぱり見通しが立たない状況であった。家紋の一致は面白いが、手がかりになり得ようか。東北の会津藩と薩摩藩は戊辰戦争で闘った間柄であるが、奄美大島とは距離がありすぎ家紋以外の接点は見いだせない。他方の大隅蒲生氏は奄美大島に近いが家紋は見いだせなかった。鎌倉・室町幕府、そして戦国時代から江戸時代に至るまでの歴史に詳しい方々の目に留まり、ご意見や情報提供があると幸いである。

参考・引用文献

- 1) 佐々木秀美著：奄美大島歴史深訪(3) —為家と琉球王国, そして為家と筆者との関係—, 看護学統合研究 Vol.24, No.2, pp49-59, 2023年.
- 2) 日下力著：保元物語, 角川スフィア文庫, 2015年.
- 3) 藤井勝彦著：源為朝伝説, 天夢人, 2022年.
- 4) 佐々木秀美著：奄美大島歴史深訪(2) —島民を苦悩させたサトウキビと家人（ヤンチュ）制度, そしてケンムン伝説—, 看護学統合研究 Vol.24, No.2, pp49-59, 2023年.
- 5) 佐々木秀美著：平家落人と源為朝伝説の島—奄美大島歴史深訪(1), 看護学統合研究, pp47-55, 2022年.
- 6) 多田元春著：古事記・日本書記, 西東社, 2014年.
- 7) 昇曙夢著：大奄美史, 南方新社, 1949年.
- 8) 喜界町誌編集委員会編：喜界町誌, pp84-85, 南日本新聞開発センター, 2000年.
- 9) 佐々木秀美著：前掲書5)
- 10) 五味文彦・本郷和人共著：吾妻鏡1-11, 吉川弘文館, 2022-2023年.
- 11) 杉本圭郎著：平家物語一〜四, 講談社, 2022年.
- 12) 日下力著：前掲書2), p57.

- 13) 穂高一男著：頼山陽日本外史を読む，p41，新日本印刷 KK，1998年.
- 14) <https://ja.wikipedia.org>.
- 15) <https://ja.wikipedia.org>.
- 16) 日下力著：前掲書 2)，p85.
- 17) 日下力著：前掲書 2)，pp85-86.
- 18) 日下力著：前掲書 2)，p198.
- 19) 日下力著：前掲書 2)，p210.
- 20) 日下力著：前掲書 2)，p211.
- 21) 日下力著：前掲書 2)，p217.
- 22) 日下力著：前掲書 2)，p235.
- 23) 日下力著：前掲書 2)，p296.
- 24) <https://ja.wikipedia.org>
- 25) 杉本圭郎著：前掲書11) 四.
- 26) 佐々木紀一著：『覚銭上人出自考，山縣県立米沢女子短期大学紀要，第五十六号，pp1-12，2020年.
- 27) 佐々木紀一著：前掲書26)，p5.
- 28) 佐々木紀一著：前掲書26)，p4.
- 29) 五味文彦・本郷和人共著：吾妻鏡 (3) 幕府と朝廷，p133.
- 30) 五味文彦・本郷和人共著：吾妻鏡 (5) 征夷大將軍，p71.
- 31) 五味文彦・本郷和人共著：吾妻鏡 (8) 承久の乱，p136
- 32) 五味文彦・本郷和人共著：吾妻鏡 (8) 承久の乱，p246
- 33) 黒嶋敏著：海の武士団 水軍と海賊のあいだ，p104，講談社選書メチエ，2013年.
- 34) 黒嶋敏著：前掲書33)，p104.
- 35) 黒嶋敏著：前掲書33)，p111.
- 36) 黒嶋敏著：前掲書33)，p118.
- 37) <https://ja.wikipedia.org>.
- 38) 黒嶋敏著：前掲書33)，p144.
- 39) <https://ja.wikipedia.org>.
- 40) 田中大喜著：薩摩千竈氏再考，国立歴史民俗館研究報告第226集，pp289-305，2021年.
- 41) <https://ja.wikipedia.org>.
- 42) 鈴木勝也著：中世尾張千竈氏に関する一考察，皇學館論叢，第43巻，第一号，2010年.
- 43) 田中大喜著：前掲書40).
- 44) 昇曙夢著：前掲書 7)，p90.
- 45) 昇曙夢著：前掲書 7)，p90.
- 46) 昇曙夢著：前掲書 7)，p90.
- 47) 喜界町誌編集委員会編：前掲書 8)
- 48) 昇曙夢著：前掲書 7)，pp90-91.
- 49) 佐々木秀美著：前掲書 1)
- 50) 伊賀倉俊貞著：校正鹿兒島外史卷ノ五，清弘堂，1885年.
- 51) 木崎好尚著：頼山陽先生：百年記念，pp252-255，頼山陽先生顕彰会，国立国会図書館デジタルコレクション，1933年.
- 52) 伊賀倉俊貞著：前掲書50)，p18.
- 53) 島尾敏雄編，田畑勇弘著：笠利家家譜の解説第三篇，奄美の文化・総合的研究，p75，法政大学出版会，1976年.
- 54) <https://ja.wikipedia.org>.
- 55) <https://ja.wikipedia.org>.
- 56) 五味文彦・本郷和人共著：吾妻鏡 (3) 幕府と朝廷，p57.

- 57) 五味文彦・本郷和人共著：吾妻鏡(7) 頼家と実朝, p248,
- 58) 五味文彦・本郷和人共著：吾妻鏡(2) 平氏滅亡.
- 59) 五味文彦・本郷和人共著：吾妻鏡(8) 承久の乱, pp72-79, 2022年.
- 60) 弁連社袋中良定著(1605), 原田禹雄訳：琉球神道記, 絡樹書林, 2001年.
- 61) 弁連社袋中良定著(1605), 原田禹雄訳：前掲書60), p236.
- 62) 昇曙夢著：前掲書7), p123.
- 63) 神田佳子他共著：奄美大島におけるノロ祭事空間の継承状況に関する研究, ランドスケープ研究 81(5), pp571-576, 2018年.
- 64) 弁連社袋中良定著(1605), 原田禹雄訳：前掲書60), p359.
- 65) 弁連社袋中良定著(1605), 原田禹雄訳：前掲書60), p166.
- 66) 弁連社袋中良定著(1605), 原田禹雄訳：前掲書60), p175.
- 67) 藤井勝彦著：前掲書3)
- 68) 瀧沢馬琴著, 丸屋おけ八訳：椿説弓張月, 2012年.
- 69) 池田理代子著：ベルサイユの薔薇, 集英社, 1972年.
- 70) 昇曙夢著：前掲書7), p122.
- 71) 昇曙夢著：前掲書7), p140.
- 72) 昇曙夢著：前掲書7), p144.
- 73) 黒嶋敏著：前掲書33), p34.
- 74) 昇曙夢著：前掲書7), pp230-243.
- 75) 外間守善著：沖縄の歴史と文化, p82, 中公新書, 2019年.
- 76) 佐々木秀美著：前掲書5)
- 77) 佐々木秀美著：前掲書4)
- 78) 森崎一貴, 近江俊秀著：境界の日本史, 朝日新聞出版, 2019年.